音のちから―中国古代の人と音楽（3）

悩める為政者

天理大学国際学部教授
中　純子　*Junko Naka*

徳に見合わない音楽を聴くと

夔や師延、士達など古代の楽人には、並外れた霊力があった。彼らが奏でる音楽は神人和合をもたらし、陰陽の狂いを調えて自然を調和させた。権力をもつ為政者であれば、そんな音楽を是非自分の耳で聴いてみたいと思うのも当然であろう。ここでは、春秋時代の晋の楽人師曠について見てみたい。

> 師曠は一説に春秋の晋の霊公（BC620頃～BC607在位）の頃の人だという。楽官をつかさどり、音律をよく理解し、兵書一万篇を著わした。当時の人は彼の素性を知らず、その生卒もはっきりとはわからない。晋の平公（BC557～BC532在位）の時、陰陽に精通していることにより、世に知られていた。なんと目を煙でいぶしてつぶし、さまざまな雑念を絶って、星宿の計算や音律だけに没頭し、鐘の陰律をたたいて春・夏・秋・冬の音を定めると、一分の狂いもなかった。『春秋』の書には、師曠がどの帝に仕えたか記されていない。師曠は自分の寿命が尽きようとするのを知り、『宝符』百巻の書を著わしたが、戦国の争いになって、滅んでしまった。（師曠者、或云出於晋霊之世。以主楽官，妙弁音律，撰兵書万篇。時人莫知其原裔，出没難詳也。至晋平公時，以陰陽之学、顕於当世。乃薫目為瞽，以絶塞衆慮，専心於星算音律，考鐘呂以定四時，無毫釐之異。春秋不記師曠出於何帝之時。師曠知其命欲終，乃述宝符百巻、至戦国分争，其書滅絶矣）
>
> 王子年『拾遺録』（『太平広記』巻203所収）

楽人師曠は音楽にだけ通じていたわけではなかった。陰陽に精通し、星宿の計算をこなし、兵書一万篇をも著わした。自然界・人間界のあらゆる理論に長けていたと言えよう。そんな師曠に為政者である平公が「清角」という曲を是非とも聴かせてほしいと懇願する次の部分をみてみよう。

> 晋の平公は師曠に清徴の調べを演奏させた。師曠は「清徴の調べは清角の調べには及びません」と言った。平公が「清角の調べを聴けるか？」と尋ねると、師曠は「公は徳が薄く、これを聴くには十分でありません。もしお聴きになれば身を滅ぼすかもしれません」と言った。すると平公は「わたしはもう年老いた。好きなものは音楽だ。どうか聴かせてくれ」と言った。師曠はやむなく演奏した。ひとたび演奏すると西北から雲が沸き起こり、もう一度演奏すると大風が吹き、大雨が降った。幔幕はひきちぎれ、祭器は壊れ、廊下の瓦は吹き飛ばされた。まわりにいた者たちはちりぢりに逃げ、平公は廊下のわき部屋に恐れおののきながら伏せた。それから晋国は大旱魃にみまわれ、田畑は三年の間というもの何も収穫できず、平公自身もついに病に倒れた。（晋平公使師曠奏清徴。師曠曰、清徴不如清角也。公曰、清角可得聞乎。師曠曰、君徳薄，不足聴之，聴之将恐敗。公曰、寡人老矣，所好者音，願遂聴之。師曠不得已而鼓。一奏之，有雲従西北方起，再奏之，大風至，大雨随之。掣帷幕，破俎豆，墮廊瓦。坐者散走，平公恐懼，伏於廊室。晋国大旱，赤地三年，平公之身遂病）
>
> 同　上

為政者が自分の徳に不釣り合いの音楽を聴いたことによって、雲や風や雨といった自然が激しく動き、それによって祭器が壊された。そうした不吉なことがおきて、災害へと繋がり、収穫もなくなり、おそらく民も疲弊して、ついには為政者自身が病に倒れた。一見すると、楽人の奏でる音楽の恐ろしさだけが印象に残るが、ここに古代中国において為政者と音楽を考えるポイントがある。徳に見合った音楽というものがあり、徳が足りなければ、それを聴くことができないのだ。もともと『韓非子』「十過」にみえるこの話は、為政者はその徳に合わせた音楽しか聴けないという教訓めいたものだ。それゆえに、後々中国の皇帝たちは宮中祭祀を執り行う際に用いる音楽である雅楽の整備に腐心する。雅楽の音律や楽曲の不具合は、皇帝の徳そのものの不足と捉えられてしまう。自分は徳の薄い皇帝なので、それ相応の音楽でいいと、潔く甘んじる皇帝はおそらく皆無だったのであろう。ここに宮中祭祀音楽の整備に力を注がなくてはならない為政者の苦悩がある。

古楽を聴くと眠くなる

のちに皇帝たちが躍起になって取り組んだ雅楽整備、その理想形として象徴的なのが伝説上の三皇五帝の音楽であり、それは「古楽」と言われた。それに対して時流にのった聴衆を魅了する音楽は「新楽」と言われた。そしておもしろいことに、いま雅楽や能楽などの古典芸能を聴く大衆さながら、古代においても、この「古楽」を聴くとすぐ眠くなってしまうと正直にいう為政者がいた。戦国時期の魏の文侯（BC446～BC397在位）は、孔子の弟子の子夏に自分の疑問を投げかけている。

> 魏の文侯が子夏にたずねた。「わたしは冠をきちんと付け、威儀をただして古楽を聴くと、ただただ退屈で眠気におそわれてしまう。しかし今流行の鄭や衞の音楽を聴くと、楽しくて厭きることがない。いったいどうして古楽はあのように退屈なのか。新楽はあのように厭きることがないのか」と。（魏文侯問於子夏曰、吾端冕而聴古楽、則唯恐臥。聴鄭衞之音、則不知倦。敢問、古楽之如彼、何也。新楽之如此、何也）
>
> 『礼記』「楽記」

古楽を聴こうと懸命に威儀を正しても、どうしても睡魔に襲われてしまう。逆に、最新の流行音楽は聴いて飽きることがない。魏の文侯に限らず、『孟子』「梁恵王篇下」でも、斉の宣王（BC320～BC302在位）が孟子に向かって、自分が好むのは「先王の楽」ではなく「世俗の楽」だと恥ずかしげに述懐している。古代においても、「古楽」はすでに夢中で聴きほれるものではなかった。それは、「新楽」や「世俗の楽」とは別物の、楽律を重視し儀礼祭祀に用いられる、所謂正しい音楽であった。しかしその正しさゆえに、心ときめかせる甘美で妖しい魅力を欠いていたのであろうか。この魏の文侯や斉の宣王の言葉に、筆者は親しみを感じる。古代の為政者も、いまの古典芸能鑑賞によくあるように、感銘すべきはずのものに眠気を感じてしまったのだ。そして彼らは魅惑的な流行音楽のほうにどうしても心ときめいてしまう自分に戸惑い、悩んでいたのである。